コロナを経験して

～　地域活動の立場から～

広島市西部認知症疾患医療センター
看護師・若年認知症専門員
岡田　眞理

居場所作りのきっかけ

・**認知症地域支援推進員**として**若年性認知症の方**が診断後から公的サービスに繋がるまでの間に不安や悩みを抱えているが、行き場がないことを痛感し**同じ病気の仲間が集う場**が必要と考えた。

・ **2017年6月**に特別養護老人ホームの**ボランティアグループ**として発足。

・現在は**認知症疾患医療センター**の職員として、認知症の方の**診断後支援**および**ピアサポートの場作りの**枠組みで派遣され共同している。

活動の概要

項目	目的	結果
開 催 場 所	地域に開かれていること	市営住宅集会所
開 催 日 時	生活のリズム作り ゆっくりできる	週1回 毎週月曜日 10～14時 （９～15時）
活 動 内 容	当事者と一緒に考える	施設・町内の手伝い 木工・音楽・スポーツ
支 援 者	若年性認知症の理解者を増やす 当事者のしたい事を支える	法人職員2 名＋センター１名 地域ボランティア(6~8名)
活動の位置づけ	施設ので地域ボランティアグループ	昼食を無料で提供

活動の実績

＜　2017年6月～2023年6月　＞

項　　目	内　　容
参加者実人数	（ スタートは2人から ） 男性18人・女性3人　　５～６名/日
年齢	40～67歳
病名	アルツハイマー型認知症 前頭葉側頭葉型認知症
介護度	未申請～要介護５
つながったルート	認知症地域支援推進員 認知症疾患医療センター・専門医クリニック 若年性認知症サポートルーム ケアマネジャー・地域包括支援センターなど

コロナ禍での本人・家族の様子

- 感染対策で一苦労、コミュニケーションにエネルギーをかける
- 室内での活動を縮小　(本人ミーティング、食事の時間など)
  できるだけ屋外の活動をと考えたが、地域との交流はなくなる
- 施設への出入り(昼食の配達)も制限がかかり緊張感を感じた
- 家族、ボランティアからは「インフォーマルサービスだから中止になっても仕方ない」とあきらめと心配の声

それでも

- 本人からは「ここだけは来たい」「仲間に会いたい」と期待された
- 緊急事態宣言に伴う広島市の地域包括への指導に基づいて中止
- 休み間も電話でつながろう、再開を願って

3回目の緊急事態宣言の時

きつね倶楽部を休めば、社会的に孤立してしまう方がいる
「このままでいいのか？」スタッフで悩む
本人と家族に「ここに**来ることで感染の機会になることもあるが**」と
しっかり話し合いして**継続**を提案
→　本人、家族は「是非お願いしたい！」

・部屋のカーテンも閉め、こっそり（非公開からのスタート）
・本人とスタッフだけ、ボランティアもなし

→ ボランティアがたまたま集会所に顔を出す
事情を話すと「自分も**自己責任で**参加したい」と参加

本人・家族・支援者の意識の変化

中止の判断基準は緊急事態宣言、行政からの指針
コロナ陽性、濃厚接触者になったら罪悪感

緊張感　思考停止
あきらめ

情報の整理
思考再開

気を付けても感染する時はする
感染しても適切に対応すれば回復
本人、家族、ボランティアが覚悟をもって再開

大切だと感じていること

- 若年性認知症の方が診断を受けて**普通の生活**が遮断される気持ち

- コロナ禍で活動を**中止して改めて**居場所の意義、つながりの必要性を実感

「ここでは認知症の鎧を脱ぐことが出来る!」

- コロナ禍ではインフォーマルサービスの継続は難しいのが現実
  でも**インフォーマルだからこそ形を変えて継続**できた
  すきまを埋める大事なサービスとして意味がある